

## スキーを通じてのコミュニケーション

### 大日方邦子

障害のある者たちのスポーツの祭典であるパラリンピックは、四年に一度、オリンピックと同じ場所で開かれる。このことは、今や多くの皆さんがご承知だろう。しかし、パラリンピックに出場するトップアスリートたちの戦いが、四年に一度だけではなく、実は毎



日は回転のレースと毎日その種目を変えながら、一つの会場で平均三〜六試合を行う。そして一シーズが終わると息つく暇もなくすぐに荷物をまとめ、次の会場に移動する。一シーズンの平均レース数は四会場で二〇試合程度。昨シーズンは半年間で海外との往復は五回を数えた。このように毎年行われる国際大会に出場し、かつ結果を出し続けることが、四年に一度のパラリンピック出場へとつながっているのだ。

ワールドカップを転戦する選手同士は、シーズン中、レース会場で頻繁に顔を合わせるため、国の枠を超えたつき合いが生まれる。互いがライバルという間柄なので、その関係

年続いている、ということはまだあまり知られていない。私が挑戦しているアルペンスキー競技においては、毎冬、ヨーロッパ各国や北米などでワールドカップを頂点とする国際的なレースがあり、選手たちは文字通り、世界中を飛び回ってレース会場を転戦する生活を送っている。ワールドカップでは、今日は大回転、明

は単なる仲のよい「友達」と呼ぶにはいささか緊張感を含みすぎるものだが、敢えて言うならば「戦友」という感覚に近いだろうか。試合直前のコース下見では時に小競り合いを起こし、時に練習コースでのスタート順を巡って争うこともある。それでも多くの選手がスタート直前に「グッド・ラック！」と声を掛け合い、ゴールでは優勝者をストレートに祝福し、勝った者は素直に「ありがとう！」と応じる。試合直後、レース特有の緊張感から解放されたライバル同士で「今日のコースはタフだった」「斜面変化のライン取りが成功した」などとひとしきり、レース結果を振り返った会話がぎやかに交わされる。短い時間ではあるが、同じコースを滑った者だからこそ、共有し合えるその感覚は国や文化、言葉の違いを超越する力を持っている。こうしたライバルとの充実したコミュニケーションは、私がレースで感じる醍醐味の<sup>だいご</sup>の一つだ。けれどもこの楽しい時間は瞬く間に過ぎ去る。レースの高揚感が冷めるとすぐに、それぞれが翌日の試合のことを考え始めるのだ。勝っても負けてもその余韻<sup>よゐん</sup>にはひたらない。試合結果に一喜一憂するのはゴール直後の一瞬だけ。気持ちを素早く切り替える精神力も、連日続く試合で戦い続ける選手には必要不可欠なことだ。

そして、戦友たちと最も充実したコミュニケーションを楽しめる時が一年に一度だけである。それはワールドカップの最終戦が終わり、そのシーズンすべての結果が出た日の夜だ。

表彰式と夕食会を兼ねたパーティーが行われる場合には、選手は夜通し語り合い、時に酒の勢いを感じながら、ダンスや歌に興じることもある。互いの母国での生活環境や、選手活動に対する考え方など、普段、ゲレンデでは話せない踏み込んだ話も、こういう席でならばじっくりとやりとりすることができる。実は、我々障害のあるアスリートたちの生活・競技環境は、国によってまだまだ差が大きい。互いの国の事情について、情報交換することでパラリンピック、そして障害のある者たちの競技スポーツがどういう役割を果たしているのか、その将来の方向性について考えを深める場ともなるし、また、普段は見えない互いの心の内をさらけ出すことで、国や言葉、文化の壁を超えたコミュニケーションがとれる貴重な場でもある。競技に打ち込む強い精神力やそれぞれが抱える課題への向き合い方など、世界の仲間たちとのコミュニケーションから得られるものも実に豊富だ。

次シーズンのワールドカップ最終戦は、実は来年二月、日本で開催される。長野県白馬村という、日本のスキー場として非常に伝統ある場所で行われるこの最終レースはおおいに盛り上がること間違いなく、選手としては今からワクワクしている。そしてレース終了後、世界から集ったライバルたちとどのような話で盛り上げられるのか、それもまた楽しみの一つだ。

(おびなくにこ  
大日方邦子 チェアスキーヤー パラリンピック金メダリスト)